When the West wind blows

亜李子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｈｅｎ　ｔｈｅ　Ｗｅｓｔ　ｗｉｎｄ　ｂｌｏｗｓ

【Ｎコード】
Ｎ１５６７ＢＡ

【作者名】
亜李子

【あらすじ】
推理小説好きな主人公、リオンが山と川に囲まれた村で次々に起こる怪事件を解き明かすミステリーホラーである。

The first story1－1 Into the country

僕が初めて挑戦する推理小説をぜひ観覧していただきたいと思います。２年ほどまえにもいろいろと小説を書かせてもらいましたが、それもついでといいので覗いていただいたら幸いです。
今後とも宜しくお願いします

The first story1－1 Into the country

１０月１０日（日本時刻）午前７時、生まれ育ったイギリスを離れ日本へと飛び立った。
僕の名前は綾瀬　リオン（璃御）高校２年生の１７歳だ。父がイギリス人で母が日本人のいわゆるハーフってやつだ。趣味は推理小説を読むことやあとはチェスをするのが趣味かな。あとは自分がなにかをする度に手帳に時間とその出来事を記すのが子供のころからの趣味だ。おかげで手帳の数は部屋一杯にあるわけだが。
　ところでなぜ僕が日本へ行くかというと、母が久しぶりに日本に里帰りするのについて行くんだ。母の父にあたるお人、綾瀬　秀人、僕の祖父は僕と同じ推理小説とチェスが好きなひとで実を言うとぼくの趣味は祖父の影響をばっちりと受けたわけだ。２年ぶりに会うのでとても楽しみなんだ。今回の里帰りには父はついてこなかった。仕事が忙しいみたいらしい。

１０月１０日（日本時刻）午後８時、空港に到着。タクシーで祖父の家を目指す。祖父の暮らしているところは美しい山と川に囲まれたひっそりとした村だ。ロンドンの賑やかな雰囲気も嫌いではないが、やっぱりこいった静かな雰囲気はやはり最高だと思う。

１０月１０日午後１１時、祖父宅に到着。あたりはすっかり真っ暗でいかにも「でそう」な感じがするのである。
祖父と軽いあいさつをしたあと、僕は就寝した。

The first story 1―2 Reunion

１０月１１日午前６時、起床。自然に囲まれた村での朝ははこの上なくすがすがしいものだった。祖父はすでに起床しており、ただ一人でチェスの盤面の思考を巡らせているのであった。祖父は僕に気づき、軽くあいさつをした後、僕は祖父の相手をすることになった。

「ふ、ははははは、やはり璃御はおもしろい。わしの相手にちょうどよいわ。」

「爺様には劣りますよ。今でも爺様と対等なのか不安ですし。」

僕はイギリスのほうでもそこそこ名の知れたチェスプレイヤーで一度テレビ番組にも出演があったぐらいなんだが、祖父と対戦をしていると、いつのまにか祖父の手にかけられいつもリザインにおいつめられるのだ。

「リザインです。爺様は本当に凄い人で寸ね。僕なんか簡単に倒されてしまう。」

「もう、リザインか。早い、早すぎるわ！思考を止めるでない。」

突然、祖父が大声をあげた。僕の記憶上では祖父はこんな大声をあげる人ではないはずだ。すると、祖父はぶつぶつと独り言を口にした。

「璃御もやはり駄目であったか。器が小さすぎる。お前との思考を巡らせる旅をもう一度したい。頼むからもう一度姿をあらわし、わしと至極の時間を過ごそう。Ｗｉｔｃｈ　ｏｆ　ｗｉｓｄｏｍ。今

度こそ勝ってお前の名を聞かせてもらいたいのだ。だからもう一度姿をあらわしてくれーーーー」

壊れたスピーカーのようになってしまった祖父をただただ、呆然と見ていることしかできなかった。

すると、母の母にあたる、つまり僕の祖母の「福音」がそっと僕の肩に手を置いた。

「おはよう、璃御ちゃん。びっくりしたでしょ？2年前からすこしおかしくなったのよ。」

「おはようございます。本当にびっくりですよ。それよりも、爺様の口から度々出るその、Ｗｉｔｃｈ　ｏｆ　ｗｉｓｄｏｍつまり智恵の魔女って言うのはいったいだれのことですか？」

僕は祖母に恐る恐る話した。なぜならば祖父とチェスをやろうだなんて村の人じゃ考えられないし正体不明の人物Ｘが存在するのは、とても怖いものなのである。すると祖母は祖父に冷たい目線を送りながら話した。

「幻想ですよ。まったく、さしずめ夢で見たことを現実であったと錯覚しているんですよ。」

祖母は呆れながら言った。

「でも気になりますよね。爺様の幻想ってやつ。どうして2年も固執するのか、一体爺様になにがあったのか詳しくしりたくなりました」

すると、奥のほうから母の声が聞こえた。

「やめておきなさい。こんなところでも推理ごっこをやるなんて。体を休めるためにきたっていうのに。とりあえず父さんのことは忘れて外でも散歩してきたらどう？」

母がそう提案すると、祖母も散歩でもしてらっしゃいと言われたのでとりあえずは爺様のことをおいておくことにした。

川沿いを歩いているといると、2年ぶりに会う久しい面影がみえた。するとその影は僕に気づいたのか僕に駆け寄ってきた。

「もしかして、璃御君だよね。ひっさしぶり！また背伸びたんじゃない？そのなんていうか・・・その、カッコよくなったよね。」

と、もじもじしながらしゃべる少女は僕と同い年の「桜　桐乃」小柄で人なつっこい子で僕も彼女のそういったところは嫌いではなかった。一見すると小学生に見える、というよりも幼さを感じるといったほうがいいのかもしれない。

「久しぶり、桐乃。お前も少し背が伸びたんじゃないか」

「え！？そうかなぁ。ふふ、嬉しいな。ありがと。ところで、いつまでこの村にいるの？」

「えっと、今回は明後日まではこの村にいるよ」
スケジュール帳を見ながら僕は言った。

「へぇ～、そうなんだ。じゃあ今日から3日間、おもいっきり遊ぼうね！璃御君。」

桐乃がにこにこしながら言った。この３日間僕は充実した休みをとれるだろうか？

The first story 1－3 According to legend

評価をいれていただきおりがとうございます。よりいっそう、評価を上げるために必ずや努力します。では、今回の話をどうぞ、ご覧ください。

The first story 1―3 According to legend

１０月１１日午前１１時、桐乃とまた昼に会うことを約束しいったん祖父の家に戻った。
玄関を開けると祖母が出迎えてくれた。

「おかえり、お昼ご飯できてるから居間にいらっしゃい。」

祖母はにこにこしながら居間へと誘導した。
今日の昼ご飯は一言で言えば純和風で、久しぶりの日本食に舌鼓を打った。僕は日本食というより、箸を使って食事をするのが好きなんだ。イギリスでも一回箸を使って食べたことがあるのだが、どうも僕のまわりには、理解できないらしい。箸というのは実に良い。食べ方も上品に見える。ナイフとフォークなんて野蛮人の使うものだって、今はそんなにおもってない、むしろ、ナイフとフォークをつかわざるをえないが、子供のころは本当にそんな事を思ったほどだ。完結に言ってしまえば、箸は非常に素晴らしい食器であるということだ。

１０月１１日午後１時、昼食を終え桐乃との約束の場所へむかう。
やはり、この村は気持ちいい。心が落ち着く。たまにはこういう思考停止もいい。

何気なく歩いていると山の中に廃墟の屋敷が見えた。自分では写真並みの記憶力を自負しているがこんな建物は２年前はなかったはず。それとも自分は見落としていただけなのか？いや、見落とすわけがない。圧倒的な存在感がある屋敷を見落とすはずがない。考えながら歩いているうちに待ち合わせ場所についた。待ち合わせ場所には桐乃以外に桐乃の友達の「菅原　鈴」と「秋瀬　美穂」の、姿があ

った。

「二人とも久しぶり。2年も経つとこんなに美少女になるなんてびっくりしたよ。」

「リオン君、久しぶり。また背が伸びたの！？どんどんカッコ良くなりやがって」

「お久しぶりです、綾瀬君。鈴ちゃんの言う通りだね。服もお洒落だしカッコいいよね。」

二人が挨拶をし終えたので自分はあの屋敷について恐る恐る口にする。前にも話したがなぜ、恐る恐る言うかというと、人物同様未知の屋敷Xが存在するだけで恐ろしく感じるからだ。すると、桐乃が口にした。

「璃御君、知らなかったの？おじいさんから聞いてないの？」

初耳だった。確かに祖父の家についてからまともに話していないから2年前以降にあの屋敷の存在を発見周りの木々を切り倒しはっきりと見えるようにしたのかもしれない。でもなぜ今になってあの屋敷をはっきりさせたのだろう？ならなぜ、昼食のときにでも話してくれればいいものの、なぜその事に触れないのか？その事ばかりが気になってしまい満足に女の子たちと話ができずに夕方になり気付いたら解散になっていた。

「リオン君。ずっと上の空だったけど大丈夫？今日はゆっくり寝て明日は一緒に学校にいこうね。それじゃ。」

「綾瀬君、その・・・屋敷には近づかないほうがいいかも。だか

らその・・・なんていうか、とりあえず気にしちゃ駄目だよ！それじゃまた明日ね。」

二人が去った後、桐乃もおかしなことを言った。

「美穂ちゃんも言ったとおり、あの屋敷のことは忘れたほうがいいよ。おじいさんにも聞かないほうがいい。とにかく、今日はゆっくり休んでまた明日遊ぼうね。それじゃ。」

桐乃も帰った後、自分はやはり気になって、しょうがなかった。あれだけの迫力があるのになぜ村の人々は触れないのか？なぜ関わらないほうがいいのか？祖父は何をしっているのか？自分の考えはこうだ。

まず、謎の屋敷Xは2年前以降から自分がこの村に来る以前の間に祖父が発見し、村の人々にも見えるようにした。屋敷の外観から相当前に建てられたものだ。なぜ、村の人々が触れないのか？これについては、たぶん、村の人々も最初は驚き、何があるのか確かめたくなり近づいたところ、何らかの事情があり、近づけない、もしくは、屋敷内まで到達しても、そこで何らかの事故にあい、それ以来村の人々は口にすることがなくなった。

やはり自分はその、「何らか」について詳しく知りたい。関わるのといわれたらますます興味を持つ。まずは祖父に尋ね、一体どういうものなのかを知った上であの屋敷に行こうと思う。

そして自分は一人、何が聞けるかわくわくしながら祖父の家へと帰っていくのだった。

The first story 1―4 Lord of the mans

１０月１１日午後７時、祖父の家に帰宅。僕は帰ってきたことを軽く知らせると真っ先に祖父のもとへと駆けた。祖父は相変わらず難しい表情をしながら一人チェスを楽しんでいた。

「爺様、少しお時間をとらしてもいいですか？」

僕はチェスに集中している祖父に話しかけた。すると祖父は難しい顔のまま僕の方を見た。

「騒々しいぞ。我が思考の旅を邪魔するとは、でてけ！今すぐわしの前から消えろ。」

祖父はものすごく怒った。しかし、僕は頭の謎を早く解きたいため引き下がらずに話を続けた。

「いつまでそこにいるつもりだ！出てけと言ったのがわからぬのか！」

「爺様、聞いてください！単刀直入に伺います。あの屋敷は一体なんなのですか！」

僕は祖父に負けないぐらい大きな声で言った。すると祖父は屋敷という単語にひっかかったのか表情をやわらかくしていつもの祖父の姿に戻った。

「璃御よ、あの屋敷に気付いたか。やはり我が孫だ。そうか、気付いたかあの屋敷に。」

「気付いた？さすがにあんなオープンに屋敷が見えたら気付かずにはいられないでしょう。爺様。」

おかしい。あんなにもはっきり見える屋敷なのに、さもがんばって気付いたかのような振る舞いを僕にしたのだ。もしかしたらあの屋敷について話しかけてくれたことによってそんなことを言ったのか。謎は深まったがとりあえず屋敷についての情報が欲しかったため祖父に続けて質問した。

「一体あの屋敷には何があるんですか？」

「魔女がいるんだよ。」

僕は呆然としてしまった。祖父がいきなりなんてことをいうのかと。祖父が夢か現実かは定かではないが魔女に会ったというし、もしかしたらあの屋敷で魔女と称した何者かが爺様と遭遇しチェスをその何者かと対局したところ、爺様が負かされたことにより、あんな幻想を抱いたということなのか？自分でそう解釈しつつ、祖父の話に耳を傾けたのだ。

「あの屋敷には・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1567ba/

When the West wind blows

2012年1月6日23時51分発行